

## 北広島町ゼロカーボンタウン宣言の趣旨

「自然の恵みを大切にし、生かし、美しく住みよい町をつくります」

北広島町は合併10周年の節目に、町のあるべき姿を町民憲章として決めました。豊かな自然の恩恵に感謝し、大切に育み、活用し、自然と共存できる美しい町づくりへの思いを表現したものです。しかし、私たちの暮らしは、本当にこの憲章が描く町づくりに結び付いているのでしょうか。

冷暖房や給湯に使う電力や灯油、自動車の燃料など、暮らしに必要なエネルギーを海外産の化石燃料に依存し、安価な海外産の食料品や木材を利用することで、本来、町の強みであるべき農業や林業の衰退が引き起こされています。また、働く場所や新たな魅力を求めて多くの若者が町を去っています。

さらに視野を広げると、私たち先進国の暮らしが、世界各地にしわ寄せを生んでいることも見えてきます。例えば、パンやお菓子、洗剤などに使われるパーム油は、地球で最も生物多様性の豊かな地域の一つである東南アジアの熱帯雨林を切り開いて作られたアブラヤシ農園で生産されます。インドネシアのボルネオ島では日本の面積の3分の2にあたる森が農園に置き換わり、今もさらなる拡大のために、泥炭地とよばれる湿地が干拓され、整地のために火が放たれています。農園の開墾によって大気中に放出される二酸化炭素量は、日本の年間総排出量を大きく上回ると推計されており、地球温暖化の一因ともなっています。一見、豊かに見える私たちの暮らしが、意図しない形で地球のどこかにひずみや変化を生み出しているのです。

地球温暖化は前例のないスピードで進行しています。北広島町でも、過去40年間で真夏日の日数が、年平均31日も増加し、夏季の猛暑や集中豪雨、冬季の降雪量の減少など、温暖化の影響を実感する機会が増えてきました。温暖化がさらに進行すれば、私たちの子どもや孫は、自然災害の激甚化・頻発化に加えて、気象不安による米の品質低下などの農作物の不作やデング熱などの熱帯性の感染症リスクに直面することになります。

地球温暖化は、主に私たちの暮らしや経済活動の中で、電気や熱、動力などのエネルギーを得るために化石燃料を燃やすことで引き起こされます。家庭での節電や節水、近場への移動を車から徒歩に変えるなど、エネルギー使用量を減らす取組（省エネ）に加えて、太陽光や水力、木質バイオマスなどの再生可能な資源からエネルギーを作り出すことが、温暖化の進行を止めるために不可欠です。

再生可能エネルギーの導入は、温室効果ガスの排出削減につながるだけでなく、副次的な効果も生み出します。例えば、森林荒廃地の木を伐り出し、木質バイオマス燃料として熱源や発電に利用することで、化石燃料の購入費用が地域の森林管理に使われるようになります。適正に管理された里山は、かつての美しい「せどやま」景観を取り戻し、土砂災害を防ぐとともに、獣害から農作物を守るバッファゾーン（緩衝地帯）として機能します。また、

里地では住宅などの建物に太陽光発電が取り付けられ、発電した電気を使うことで日々の電気代を節約するとともに、蓄電池と組み合わせると災害時の非常用電源としても使うこともできます。このように、地球温暖化防止の取組は、私たちの暮らしに新たな我慢を強いるものではなく、地域の課題を解決し、美しく住みよい町の実現につながる可能性を秘めているのです。

北広島町には、面積の83%を占める森林と、それらが涵養する豊富な水資源、なだらかな山間に開けた平地が存在します。かつては、これらの自然の恵みを生かして、伐り出した木材で家を建て、生活の道具を作り、炭や薪で暖をとり、あるいは田畑の作物を煮炊きする自給自足の暮らしが営まれてきました。60年ほど前までは炭や薪をエネルギー資源として地域外に輸出していたのです。今後、身近な自然からエネルギーや食糧を得る知恵や技術を、現在の暮らしに合わせて取り入れることができれば、私たちの暮らしは、より豊かで持続可能なものになります。

今を生きる私たちが、私たちの暮らしの代償を地球上のあらゆる地域の人々や、将来を担う子どもたちに押し付けないために、そして、身近にある資源を最大限活かして地域課題を解決し、心豊かに暮らしていくために、住民、事業者、町が協働して2050年カーボンニュートラルに向けて取り組みを進めていきます。